



番外編 戦後保守政治の本流



高度成長期の日本に、保守vs革新の時代がありました。自民党＝保守・資本/自由主義・経済界・小さな政府 vs 社会党＝革新・社会主義・労働組合・大きな政府という構図の元で、さまざまな政治課題でことごとく対立しました。

他方戦後の社会経済の変化は激しく、与党であり続けた自民党は次々に新施策を打ち出し、公共投資を行い、新しい制度を構築しました。保守と言いながら実は守るといふより既存社会を変え、政府部門を大きくし、新秩序を作ろうとしたのです。これに対して野党であり続けた革新陣営は、逆に新制度の導入や既存秩序の変更に強く抵抗しました。

政権交代を経て、いまやイデオロギー的に何が保守で何が革新かは明確ではありません。しかし社会経済の変化に政治がどう対応するのかという問題は常に存在します。

社会の安定と秩序を求める人は「今のままでなぜ悪い？」と言うでしょう。「保守」という言葉が、古いものを守るのが大切だという価値観のもと、高度成長期とは逆に新しいものを拒否し、官僚機構とともに旧秩序、既得権益の守護神になり始めています。

しかし、社会は大きく変わっている、日本は豊かだと思っていたのに貧困化が進み、家族や地域コミュニティが崩壊し、世界の進歩に取り残されている、このままだと大変だ、という意識を持つ人は、「今のままでなぜ良い？」と考えます。

私は後者です。戦後成長期の保守政治は、今のままでいいのかという危機意識を持ち続けて新秩序を創造しました。

しかし今日、社会がどんなに大きく変わっても見たくないものを見ようとしぬ人たちに迎合して、今のままで何が悪いの？と嘯く政治家や経済人。

一寸先の日本の経済や社会の姿はたちまち見えてくるでしょう。選挙の結果も含めしっかり責任を取ってほしいと思います。